

文学から読み解く〈トリスタンとイゾルデ〉

喜多尾道冬

12世紀フランスで登場した 最も名高い悲恋物語

実話、架空を問わず悲恋物語でもっともよく知られているのは『ロミオとジュリエット』だろう。それに次ぐのが『トリスタンとイゾルデ』か。『マノン・レスコー』や『ペレアスとメリザンド』はどうだろう。どれも架空の物語だが、実話では知名度は劣るにせよ『アベラールとエロイーズ』や『パオロとフランチェスカ』もこの系譜につらなる。

そのうち『アベラールとエロイーズ』を除いて、他のすべては名のある作曲家によってオペラ化されている。なかでもっとも名高いのは、言うまでもなくワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』だ。

この物語は12世紀のフランスで歴史・物語を意味する『エストイレー』という書物にはじめて書かれた。12世紀というと、まさにアベラールとエロイーズが愛の手紙を交わし合っていた時期にあたる。中世のきびしい信仰の時代に光が射し、人間らしい愛の想



アベラールとエロイーズ (画：ジャン・ヴィニョー)

いに期待が寄せられはじめたと言えるかもしれない。

当時、アベラールとエロイーズの愛が世に大きな衝撃を与えたように、架空の物語とはいえ『トリスタンとイゾルデ』も形を変え、またたくまにヨーロッパに広まっていった。

この物語はケルト、アングロ・ノルマン、フランスの複雑な地政的対立がからんで、アーサー王伝説と結びつき、ノルマン人がイギリスの王冠の正統な継承者であることを目的として書かれたとする説があり、その際アーサー王伝説は政治の側面、トリスタン物

語は恋愛の側面を分担したという見方もある。

物語を構成する 三つの柱

『エストイレー』のいわば原トリスタン物語は三つの柱からなる。

1 イングランドのコーンウォールの王マルケはモーロルトから貢税を強要され困窮している。見かねた王の甥トリスタンはモーロルトを殺す。しかし、毒をぬった相手の剣で傷つく。彼はその治療に通じたアイルランドのブロンドのイゾルデのおかげで回復する。ところが彼女はモーロルトの姪。それと知らずに仇敵のトリスタンを救ったことになる。

2 つばめがマルケ王のもとにブロンドの髪を^{くわ}啜^{きゅうてき}えてくる。彼はトリスタンに髪を持ち主を探す旅に出るよう命じる。探し出した相手はイゾルデ。しかも、モーロルト殺しが露見してはげしい憎しみを買う。それでも彼女を伴い、コーンウォールへの船旅をともしする。しかし、ふたりは彼女の母が自分の娘とマルケ王のために調合した媚薬をうっかり飲んでしまう。マルケとイゾルデの結婚後、トリスタンとイゾルデの密通が露見して、彼女は火刑を宣告される。しかし減刑されてふたりは森のなかで暮らす。



トリスタンとイゾルデ (画：J・W・ウォーターハウス)

3 イゾルデは許されて王のもとにもどり、トリスタンは追放される。そしてフランスで白い手のイゾルデと結婚する。だが、ブロンドのイゾルデを忘れない。コーンウォールにひそかにもどるものの、そこで傷つき死の床につく。ブロンドのイゾルデが呼ばれる。もし彼女がくるなら、船は白い帆を掲げているはず。しかし、白い手のイゾルデはあらわれた船の帆は黒と嘘をつく。トリスタンは失望のあまりこと切れる。到着したブロンドのイゾルデは、トリスタンの遺体に身を投げて死ぬ。

前述したように、この物語はヨーロッパ各地に広まっていった。とくに**2** が関心を呼び、ドイツのオーベルゲやフランスのベールールなどはトリス

タンとイゾルデの愛の高尚化を目指し、フランスの作家トマにいたっては不実も後悔もない愛の謳歌^{おうか}に形を変えている。

その後、13世紀のドイツのシュトラースブルクはこの物語を当時盛んだった中世の騎士のミンネ、いわゆる騎士の宮廷愛になぞらえ、「愛の死」の代わりに別離による忍苦に愛の精神的な純化を求めた。

中世から近世にかけての16世紀に、ワーグナーの楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉に登場する実在の劇作家ハンス・ザックスは、『雄々しく美しいトリスタントと美しい王妃イザルデの悲劇』と題するドラマを生んだ。これは原トリスタン物語をほぼ忠実になぞりながらも、ドラゴン退治などのエピソードが新たに挿入されている。

形を変え語り継がれる 愛の物語

その後、この主題は忘却^{ふち}の淵に沈む。しかし、19世紀に入るとドイツで復活してシュレーゲルやアルニム、ブレンターノといったロマン派の作家・詩人たちがこの題材に挑戦。なかでもワーグナーの〈トリスタンとイゾルデ〉は抜群の知名度を誇る。しかし、彼の台本は白い手のイゾルデを省いて

いる点が特異だ。逆に、当時のイギリスでアーノルドは白い手のイゾルデを中心に物語を構成している。

20世紀に入ると、ドイツではマルケ王が嫉妬のあまりトリスタンを殺す作品が書かれているが、**3**の白い手のイゾルデに関心が向かっているのが特徴だ。フランスでは、12世紀のベールールを下敷きにベディエがこの素材を『トリスタンとイゾルデ物語』として小説化し、イギリスではスウィンバーンやハーディなど^{そうそう}錚々たる作家がこの題材を手がけた。

なかでももっともよく知られているのは、コクトーの台本による映画『悲恋』だろう。時代は現代に移され、トリスタンはパトリス、イゾルデはナタリーと名を変え、ここでも白い手のイゾルデにあたる第2のナタリーは嘘をつく。けれどもパトリスの悲痛な失望の表情を見て後悔の念に駆られ、「嘘よ、船のスカーフは白」と言い直す。パトリスは「でももうだめだ」と言ってこと切れる。

幕切れをたんなる伝統的な嘘で終わらせず、嘘の後ろめたさの心理を新たに掘り起こした解釈に人間の真実を突くものがある。それを参考として21世紀の現在、オペラの演出を含め、トリスタン物語に新しい展望が開けるのを期待したいところだ。

(きたお みちふゆ・ドイツ文学者)

カンブルランが語る〈トリスタンとイゾルデ〉① 夜の場面で深まる「愛と死」



ワーグナーの楽劇〈トリスタンとイゾルデ〉には、音楽の面でもさまざまな特徴があります。それらをどう料理して聴き手に示すかは、指揮者の腕の見せどころ。読響の常任指揮者シルヴァン・カンブルランは、歌劇場でのキャリアも長いベテランです。日本ワーグナー協会で行ったレクチャーでは鋭い作品分析を交えて、その魅力や聴きどころを解説しました。

(4月11日・東京芸術劇場、司会は山崎太郎・東京工業大教授)

「愛よりも死が大事」と語る二重唱

— この作品では、音楽の性格分けがドラマ展開の上でも効果的に用いられていますね。

「まず第1幕では前奏曲から、いわゆるトリスタン和音が駆け上がり、情熱がほとばしります。心を揺さぶられ

る音楽が続いた後、マルケ王が登場する場面になると、ハ長調の平べったい音楽に変わる。これはマルケ王が生きている卑俗な社会を、秩序だった保守的な和音で表現しているからです。逆に言うと、トリスタンたちが居場所のない世界にいることも示します」

— クライマックスのひとつとなる第2幕は、ことに象徴的な部分です。

「第1幕の終わりでトリスタンとイゾルデは死を決意しますが、毒薬が媚薬にすりかえられ、命を永らえる。続く第2幕は、夜の場面であることが重要です。二人はオペラ史上、もっとも長

いと言われる〈愛の二重唱〉を歌います。この長い長い対話の間、二人は“愛している”とは一度も言いません。そもそも愛とは何なのか、を文学的に議論している二重唱であり、夜についても語ります」

「そして長い二重唱のメインのテーマは、理想の愛ではなく死、どういうふうに死ぬことが許されるのか、なのです。キリスト教的な〈愛は死に勝る〉という発想ではない。音楽がたとえ悦乐的であっても、中味は〈愛の二重唱〉ではなく、死について語られ、愛よりも死の方が大事、と歌っていきます」

効果的なハーモニーとリズムの活用

— ワーグナーは第2幕で「夜」や「エロス」を表すために、どんな工夫をしていますか。



〈トリスタンとイゾルデ〉第1幕より ©A.T.Schaefer

「大部分がオーケストラの色彩によって描かれます。まず特別なハーモニーで夜の訪れが準備され、各楽器によって〈音のじゅうたん〉が広げられます。絡み合ってゆっくり動く音型がセクシャルで、気持ちよく心地いい調和を醸しながらも、不穏な違和感を忍ばせ、侍女ブランゲーネが警告を発する場面で2度、陶酔を中断させます。二人の気持ちは次第に変容し、楽音の主力が高域へ移りアツチェレランド(テンポを次第に速める)が強調されて音楽が高揚しますが、絶頂は来ない。結局、破滅が訪れて、二人の面会は成功しません」

— シンコペーション(リズムの切分法)の連続も効果的です。

「森や風といった自然を描写し、ロマンティックな要素を際立たせる手法として重要な意味を持っています。拍を単純に刻むのではなく、さらに、さ



トリスタン役のエリン・ケイヴス

まざまなテンポを使うことでも自然を表現していく。人間の肉体も自然の一部と捉え、体内の血の流れや息遣い、呼吸が速くなるといった身体的な要素までを、音楽で表しているのです。ここがワーグナーの天才たるゆえんで、精密にリズムを考えて実現させた。この作品の秘密のひとつが、そこに隠されています。私はそれを最大限、演奏で表現するのに精一杯です」

慣習的なカットはすべて復元

——第2幕では300小節を超えるカットが、通常の上演では慣習となっています。今回は、どうされますか。

「全部、演奏します。〈愛の二重唱〉の部分に当たりますが、このカットは伝統的になってしまい、パイロイト音楽祭でも行われていました。これはテノール歌手の力量とも関係してきます。トリスタン役のテノールには、ものすごく難しく大変な部分なのに加

え、この後の第3幕では、さらに大切に長い場面が控えているからです」
——声の温存が必要なわけですね。しかし、カットしなくても大丈夫だと。

「ここでのテノールのモノローグは、夜の世界と対になる光について語っているととても重要な部分です。今回、トリスタン役を歌うエリン・ケイヴスは、まだ若いので大丈夫。他の部分を含めてエネルギーを配分し、全部歌ってもらえるよう努力しました。ただでさえ長い作品ですが、全部の音符を演奏したいのです」

——シュトゥットガルト歌劇場のように、質の高い上演を続けるためには何が必要ですか。演出に不満がある時などは、諦めて指揮するのでしょうか。

「歌劇場側の姿勢にかかっています。上演の2年前に始まる準備段階から演出陣と話し合っ、チームとして良い仕事をする点を重視します。世界初演の作品であっても、事前にどれだけ打ち合わせができているかどうか、成功の秘訣。私が心掛けているのは、副指揮者に任せずリハーサル7週間に丸々参加して、全部の指揮をすること。最初から最後まで関わっているからこそ、良い上演ができるのです」
——そうやって現地での〈トリスタンとイゾルデ〉公演を成功に導かれたわけですね。読響での公演も素晴らしい舞台となることでしょう。（おわり）

シュトゥットガルト歌劇場 伝説的なワーグナー 上演を誇る名門

冬のバイロイト

ドイツ南西部の街、シュトゥットガルトの中心部にある歌劇場は1912年にオープンしました。起源である宮廷劇場の時代から数えると、すでに300年以上の歴史があります。開場の年には、作曲家リヒャルト・シュトラウスが〈ナクソス島のアリアドネ〉を自らの指揮で世界初演しました。

オペラ上演に精通した職人^{かたぎ}気質の指揮者や演出家を多数迎え、着々と実績を重ねてきた同歌劇場は、第2次世界大戦後の1950～60年代に最初の黄金期を迎えます。作曲家リヒャルト・ワーグナーの孫にあたる演出家、ヴィーラント・ワーグナーらが中心となって、優れたワーグナー作品上演を続けました。そのため、有名な毎夏恒例の音楽祭になぞらえて、シュトゥットガルト歌劇場は「冬のバイロイト」と呼ばれ、称賛を浴びました。

20世紀の三大リング（指環）

1991年に辣腕^{らつわん}で知られるクラウス・ツェーラインを支配人に迎えると、音楽を中軸に据えつつ演劇性に富んだ演出を取り込む最先端の「ムジークテア



シュトゥットガルト歌劇場外観 ©読響

ター」として一世を^{ふうび}風靡しました。

ツェーライン時代に最も注目された上演のひとつが、ワーグナーの楽劇〈ニーベルングの指環〉（99～2000年制作）です。4部作に異なる4組の演出家を当て、それぞれの作品の特質を引き出す手法で成功を収めました。指揮は当時の音楽総監督のローター・ツァグロゼクが通して務め、全体を引き締めました。ツァグロゼクは2016年3月に読響へ初登場する予定です。

この〈指環（リング）〉上演はドイツの批評陣から、ヴィーラント・ワーグナーの舞台、フランスの名演出家パトリス・シェローの舞台と並んで、「20世紀の三大リング」に数えられています。

現在の音楽総監督カンブルランも、こうした伝統の中で優れた公演を作り続けています。

◎ヴァイオリン奏者

荒川以津美

Izumi Arakawa

ワーグナーの魅力に
ハマってしまいました

「読売日本交響楽団にはオペラ好きも数多い。荒川さんはその一人で、熱心なワーグナー・ファンでもある」

オペラに興味を持ったのは、東京芸術大学の附属高校の時です。副科で声楽をとっていて、高2の時にはミラノ・スカラ座の来日公演を聴きました。クライバーの指揮で、演目はヴェルディの〈オテロ〉だったのですが、ドミンゴはじめ凄いキャスト！ オペラに目覚めましたね。それから、イタリア・オペラを中心に聴き始めました。ワーグナーが大好きになったのは、ずっと後の2002年1月、バレンボイム率いるベルリン国立歌劇場の来日公演で〈ニーベルングの指環〉を聴いたのがきっかけです。しっかり予習しました（笑）。ビデオも観ましたが、一番役に立ったのは示導動機（ライト・モチーフ）についての解説ですね。ワーグナーには、登場人物などの主要な動機を頭に入れて聴くと、流れがわかるという面白さがあります。長大な楽劇も理

解しやすくなりますよ。

「読響は近年、二期会の主催するオペラ公演に出演する一方、演奏会形式のオペラにも取り組んできた。荒川さんにとって衝撃的な体験は2002年秋、読響創立40周年記念のアルブレヒト指揮によるワーグナーの楽劇〈パルジファル〉舞台上演だった」

アルブレヒトはそもそもオペラ畑の指揮者でした。実際にオペラと一緒に演奏してみて、その存在感の大きさ、音楽の素晴らしさに驚きました。ポール・エルミング（パルジファル）、ペトラ・ラング（クンドリ）、クルト・モル（グルネマンツ）などキャストも凄かった。私は、アルブレヒトはとくにワーグナーの音楽にぴったり合っていたと思います。水を得た魚のように、ハマった感じがしました。

「ワーグナーの聖地、ドイツのバイロイト祝祭劇場でも観てきたそうですが、世界中のワーグナー・ファンが集まる音楽祭は如何でした？」

バイロイトにいつか行きたい、と思っていたら、幸運にも2009年夏、ミュンヘンの知り合いから、「チケットが当たったから来ない？」と誘われて、これはぜひとも行かねば、と休みをとって行ったのです。〈ニュルンベルク



のマイスタージンガー〉と〈ワルキューレ〉を聴くことができました。祝祭劇場のオーケストラピットは、通常のオペラハウスとは違い、舞台の下に潜り込むようにできています。客席からは見えないし、音も直接届くわけではありません。楽員たちは、歌とのバランスを気にすることなく思い切って演奏できるだろう、と想像しながら聴いていました。観客の雰囲気も良くて、オペラを聴くのに集中し、楽しんでいました。劇場の外には美しい庭園があり、幕間の長い休憩中に散歩したり、ビールを飲んだり……。ゆったりと過ごせる雰囲気が魅力的でしたよ。楽員さんたちも外に出てきて家族と会話していましたし、メルケル首相もいらしていた。面白かったのは大劇場のそばに、小さな劇場があって、子供向けのワーグナーのオペラを上演していたことです。小さいころから馴染

んでいるんですね。
「今回の〈トリスタンとイゾルデ〉は読響の目玉公演の一つだ」

私は〈トリスタンとイゾルデ〉を初めて弾きます。カンブルランはシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督で、オペラ畑の指揮者です。経験豊富

でワーグナーもずいぶん振っているそうですね。〈トリスタン〉で、どういうリーダーシップを発揮するのか。知性的な人なので、どんなイメージを持って音楽されるのか、とても楽しみです。
「演奏家にとって、ワーグナーの楽劇の持つ魅力とは？」

ワーグナーの音楽は、とてもドラマチック。サウンドに麻薬的な魅力があり、物語の世界に引き込まれ、どっぷり浸ってしまいます。オーケストレーションが素晴らしく、オーケストラが歌の伴奏でなく中心であると感じます。音楽が途切れずにずっとつながっている、演奏は大変ですが、充実感がありますね。普段、交響曲の公演の場合、3日ほど練習して本番、そして頭を切り替えて次の曲に向かいますが、オペラの場合は1～2週間練習します。長い時間をかけて一つの作品とつきあうのも楽しいことです。

俊英・下野のダイナミックな〈巨人〉、名手モワネとの共演も

10/ 2 (金) 19:00 第4回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

10/ 3 (土) 14:00 第83回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

モーツァルト：オーボエ協奏曲 K.314

マーラー：交響曲 第1番〈巨人〉

指揮：下野竜也

オーボエ：セリーヌ・モワネ



セリーヌ・モワネ

現代音楽の大家アダムズの傑作〈ハルモニーレーレ〉を披露

10/13 (火) 19:00 第552回 定期演奏会
サントリーホール

ベートーヴェン：序曲〈コリオラン〉

ヒンデミット：〈白鳥を焼く男〉(ヴィオラと管弦楽)

ジョン・アダムズ：ハルモニーレーレ (和声学)

指揮：下野竜也

ヴィオラ：鈴木康浩(読響ソロ・ヴィオラ)



下野竜也

こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。

以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※ 初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

10月 公演の聴きどころ

10月は、首席客演指揮者の下野竜也が大活躍する。2日と3日には、マーラーの人気交響曲第1番〈巨人〉を指揮し、恋愛への憧れや失恋の苦悩など多感な青年期の葛藤を鮮烈に描き出す。下野は、今年1月にマーラーの交響曲第5番を指揮し、緻密なアンサンブルと重厚なサウンド作りで絶賛を博したばかり。今回も、心揺さぶる熱い演奏が期待できそうだ。モーツァルトの協奏曲では、日本でも人気のオーボエ奏者セリーヌ・モワネが初共演。ドレスデン国立歌劇場でソロ・オーボエを務める実力派が華麗な独奏を聴かせる。

13日の定期は、近・現代曲の解釈に定評のある下野が、アメリカを代表する現代作曲家ジョン・アダムズの力作〈ハルモニーレーレ (和声学)〉を指揮する。1985年に作曲されたこの作品は、アダムズがミニマル音楽の響きと調性音楽の響きを組み合わせ、“現代のハーモニー”を追求した傑作で、20世紀のあらゆる音楽、さらにはワーグナーなどへのオマージュが込められている。目まぐるしく展開していくハーモニーのリフレインは、現代音楽ファンの耳にも、現代音楽になじみの薄いファンの耳にも深い感銘を与えるだろう。ラトル、ティルソン・トーマスら世界的指揮者が演奏し、CDもリリースされるなど国際的に注目されてきた作品ながら、日本では1986年の初演以来、一度も演奏されていない。今回、約30年ぶりとなる待望の再演に、アダムズ作品の演奏で確かな実績を残す下野が並々ならぬ意欲を持って挑む。ぜひ、最高の音響を誇るサントリーホールで、アダムズが導き出した至高のハーモニーを全身で浴びていただきたい。

また、〈ハルモニーレーレ〉の前には、読響ソロ・ヴィオラ奏者の鈴木康浩をソリストに、ヒンデミットの名作〈白鳥を焼く男〉を演奏する。ヴィオラのための傑作を数多く残したヒンデミットが、親しみやすい民謡の旋律を基に協奏曲風に仕上げた佳品で、この楽器の魅力を存分に発揮させる。こちらも聴き逃さない。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

古典派を得意とする菊池が、木管楽器の名手達と共演！

11/5 (木) 19:30 第8回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《菊池洋子×読響の室内楽》

モーツァルト：歌劇《魔笛》序曲（木管五重奏版）

モーツァルト：ピアノと管楽のための五重奏曲 K.452

ベートーヴェン：ピアノと管楽のための五重奏曲

ピアノ：菊池洋子

フルート：一戸 敦

オーボエ：嶋崎耕三

クラリネット：金子 平

ファゴット：井上俊次

ホルン：松坂 隼



菊池洋子

名匠ヴァンスカが登場。実力派ラ・サールが人気曲を弾く

11/20 (金) 19:00 第19回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

11/21 (土) 17:00 第12回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール (大阪) **完売**

シベリウス：交響詩《フィンランディア》

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番

シベリウス：交響曲 第2番

指揮：オスモ・ヴァンスカ

ピアノ：リーズ・ドウ・ラ・サール



オスモ・ヴァンスカ

シベリウスの生誕150周年を祝して贈る《名曲選》

11/27 (金) 19:00 第586回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

11/28 (土) 14:00 第181回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：《カレリア》組曲

シベリウス：ヴァイオリン協奏曲

シベリウス：交響曲 第1番

指揮：オスモ・ヴァンスカ

ヴァイオリン：エリナ・ヴァハラ



エリナ・ヴァハラ

神秘の宇宙。シベリウス・イヤーを締めくくる後期交響曲

12/4 (金) 19:00 第553回 定期演奏会
サントリーホール

シベリウス：交響曲 第5番

シベリウス：交響曲 第6番

シベリウス：交響曲 第7番

指揮：オスモ・ヴァンスカ



オスモ・ヴァンスカ

ドイツで活躍する名匠・上岡が振るベートーヴェン〈第九〉

12/18 (金) 19:30 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール ※19:00からプレ・コンサート

12/19 (土) 14:00 第182回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/20 (日) 14:00 第84回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/22 (火) 19:00 第587回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

12/24 (木) 19:00 第5回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

12/25 (金) 19:00 第20回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26 (土) 17:00 第13回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール (大阪)

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：上岡敏之

ソプラノ：イリーデ・マルティネス

メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：吉田浩之

バリトン：オラフ・シゲルザルソン

合唱：新国立劇場合唱団

合唱指揮：三澤洋史



上岡敏之



イリーデ・マルティネス



清水華澄



吉田浩之



オラフ・シゲルザルソン

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

熊谷市誕生10周年記念

尾高忠明 × 諏訪内晶子 with 読響 シンフォニックコンサート

■ 9/22 (火・休) 15:00 熊谷文化創造館さくらめいと 太陽のホール

ウェスタ川越オープニング記念

読売日本交響楽団 特別演奏会

■ 9/23 (水・祝) 14:00 ウェスタ川越 大ホール

指揮：尾高忠明

ヴァイオリン：諏訪内晶子

リャードフ／〈魔法にかけられた湖〉

モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲 第5番〈トルコ風〉

チャイコフスキー／交響曲 第4番

[料金] 9/22：S ¥6,000 A ¥5,000 B ¥4,000 高校生以下 ¥3,000

9/23：S ¥5,000 A ¥4,000 B ¥3,000

[お問い合わせ] 9/22：さくらめいとチケットセンター 048-532-9090

9/23：ウェスタ川越 049-249-3777

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」 公開録画

■ 9/28 (月) 19:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮：飯森範親

打楽器：岡田全弘、西久保友広、野本洋介 ほか

三木稔／マリンバ・スピリチュアル

レスピーギ／交響詩〈ローマの祭り〉 ほか

[お問い合わせ] 「読響シンフォニックライブ」 ホームページ

<http://www.ntv.co.jp/yomikyo>

※ 本公演の応募は締め切りました。

東京芸術劇場シアターオペラ vol.9 (全国共同制作プロジェクト)

■ 10/22 (木) 18:30、10/24 (土) 14:00、10/25 (日) 14:00

東京芸術劇場コンサートホール

指揮・総監督：井上道義 演出：野田秀樹

出演：ナターレ・デ・カロリス、テオドラ・ゲオルギュー、小林沙羅、大山大輔 ほか

合唱：新国立劇場合唱団

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉～庭師は見た！～ 新演出

(全4幕・字幕付 原語&一部日本語上演)

[料金] SS ¥12,000 S ¥10,000 A ¥8,000 B ¥6,000 C ¥4,000 D ¥3,000

E ¥1,500

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296